



というのはややこしい。譬の字にデンの読みも加えていたのだらと思う。

小生は皮膚科医であるが、この書で正しい読みを確認できたものも少なくない。発疹はハッシンでなくホッシンであり、貼付はテンプでなくチョウフであり、皸裂はキレツとも読める(クンレツ、現在は主としてキレツは亀裂を用いる)などである。本書で初めて知った皮膚科関係用語も少なくなく、不勉強を恥じるとともに編集者、監修者のご苦心・ご苦労のほどを察した。医学図書館では必備の基本書であろうし、我々も座右において精々利用したい一書である。

(長門谷洋治)

〔櫛ミクス、一九九〇年、B6変形判、二九〇頁、定価二、三〇〇円〕

### 坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』

本書は、冒頭にもしるされているように、昭和六十、六十一年度の二年間継続した文部省科学研究補助金による同名の研究成果をまとめたもので、二十九名の方々執筆されている。

「養生」とは、本書の中でも、柴田清継氏が述べているように、これを「ヨウジョウ」と読むか、「ヨウセイ」と読むかで違いをうむ。医とは大きく cure と care に分れるが、care についてみれば、前者は after care で日常我々が使っている「病は養生第

一」といった意味がある。後者は Before care であり、いかに病気にかからぬか、健康でいられるか、その結果、いかに長生きできるかということで、本書はこのことについて検討を加えたものである。

現在の気功、薬膳、さらに少し前の太極拳などにこの想いは生きつづいている。この理由を掘りさげる必要があるわけで、それは強く受けつがれてきた中国人の現世利益主義とか福・禄・寿といったものに結んでいる。

また養生とは、養生、衛生という言葉にも似ている。またさらに、性と命という問題にも触れていく。あるいは、養生を自己的養生と、他力的養生にも分けられよう。さらに、養生と中国伝統医学とはひろく、オーバラップしているし、中国古代の神仙術、道家の思想、東漢末におこった道教(仏教とも)ともひろく関係している。このような前提で本書を読むと、内容も多岐にわたっていることがわかる。筆者が読んで、興味を持ち、かつ参考になったのは、やはりその第一章「医薬学と養生思想」であった。枚数の関係で細かく触れる余裕もたないので、その題名と著者とを紹介しておく。

『山海経』の山経にみえる薬物と治療(大形徹氏)

中国古代医書中の物産誌的考察(米田該典氏)

気功養生学と陰陽学誌(焦国瑞氏、奈良行博氏訳)

踵息考(石田秀実氏)

寒食散と養生(赤堀昭氏)

古代中国に於ける養生術的「匂い」の発端(高橋庸一郎氏)で